海外アカデミックディスカッション	
Dancescreen2010/Cinedans2010	
松岡　綾葉	比較社会文化学専攻
期間	2009 年 12 月 8 日～2009 年 12 月 21 日
場所	アムステルダム（オランダ）
施設	De Ballie

内容報告

1. 本アカデミックディスカッションの必要性と目的

ダンスの映像作品であるビデオダンス（video dance）は国内における先行研究が殆どなく、また研究資料にも乏しいことから、海外を視野に入れた研究が必要不可欠である。特にビデオダンスが先進している欧米は、作品製作やフェスティバル・シンポジウム・ワークショップ等の実践活動が多く展開されていることから調査の目線を向けるべき地域である。筆者は修士論文研究時に一度海外調査研究（オランダのビデオダンスフェスティバル調査）を行い、フェスティバルの概要把握及び特性考察における観点を導き出したが、特性の考察において課題が残された。博士論文研究では、ビデオダンスが既存の舞台作品とは異なる特徴を更に掘り下げていくため、本アカデミックディスカッションでは①まず先行研究の発見と映像作品の収集、②考察内容をより細分化し、ビデオダンスの特徴を明らかにする観点を導きだすためにシンポジウム等で言説を得ること　以上を主な目的としてプログラムに参加した。

2. 本海外アカデミックディスカッションへの参加で明らかとなったこと及び今後の研究における位置づけ

まず最も重要な成果はビデオダンス研究の方向性と展望に再び向き合い、再考できたことである。これまで国内で先行研究が見つけられず舞踊学・映像学からの知見を交えながら手探りの状態で研究方法を編み出してきたため、しばしば方向性で迷いが生じたが、本ディスカッションでは最前線で活動する映像作家・研究者・組織関係者などと直接言葉を交わし、交流を持ち、ビデオダンスの本格的な先行研究をようやく見つけることができた。国内では見つけることのできなかったこれらの先行研究は、本研究において、ビデオダンスの特徴についての明確な切り口や論拠をもたらすものと考える。そしてグローバルな規模での研究が求められる本領域において、世界との繋がりを持ち、情報や見解を入手可能な状態にすることができた。このことは大きな前進であり、今後の方向性や明らかにすべきことを再考するきっかけとなった。

次にシンポジウム・パネルディスカッションへの参加を行ったが、これらのプログラムは実践的な方法論について意見交換・情報共有を行い、世界中での取り組みを高めていく主旨のものであった。これによってビデオダンスフェスティバルのマネジメント（集客や助成金の獲得について）や映像作家と振付家の作品製作における関係性、映像を使用した新たなテクノロジーの開発等、開催と創作両面についての実践的な状況を概観することができた。本研究の考察の核ではないが、ビデオダンスの現状についての論考において重要な位置を占めると考える。ビデオダンスはどのように製作され、配信されているのか。その詳細な過程は、考察を行う上で前提として明らかにしておくべきところであり、ビデオダンスの第一線で活動する作家・TV局関係者・組織運営者による本プログラムのパネルは重要な一次資料となった。またパネル中におけるプレゼンテーションから、ビデオダンスのアカデミックな研究活動は欧米の中でも特にイギリスとアメリカによって牽引されており、今後の調査研究地域の限定の見通しが明らかとなった。

そしてフェスティバルで多数の作品に触れ、コンペティションの結果等を踏まえ、作品にみられる傾向からビデオダンスの特徴の視点について新たな見解を見出すことができた。それは、舞踊の専門的な訓練を受けておらずかつ日常生活においても踊る機会をそれほど持てない人々、とりわけ障害者・高齢者などにスポットを当てたことである。これらの人々が踊り表現する様子をカメラで捉え、普段見ることのできない光景を詳細にかつダイナミックに映像で描き出したことは、今後のビデオダンスの新たな方向性であり、舞踊の可能性を広げると考える。舞踊の専門的訓練を

受けたダンサーではなく、プロフェッショナルでないダンスに価値を見出し、映像技術によっていかに生き生きと劣らない迫力を感じさせるかという可能性への挑戦は新たな試みである。この新たな展望の発見は、分析の視点の幅を広げ、考察の一助となった。

以上、本プログラム参加による研究成果から、前提として明らかにすべきビデオダンスの製作と配給の現状を論じ、先行研究からのアプローチによって、ビデオダンスとはどのようなものか再考していく。そこからビデオダンスの特徴について「身体性」と「社会性」という視点を再度検証し考察を行っていきたい。今後、本海外アカデミックディスカッションへの参加による研究成果を「ビデオダンスフェスティバル一事例による海外でのビデオダンス実践の現状」としてまとめ、研究発表の場としてはまずお茶の水女子大学人間文化論叢への投稿を予定している。

まつおか　あやは/お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻